

析・予測技術、さらには、それらを整備・運用する人材と経験について十分な蓄積を持っており、日本からの支援がこれまで以上に必要になってくるものと考えられます。

最後の市民防衛局(Office of Civil Defense)ジャラド(Jalad)部長の講演では、2010年に施行された「フィリピン災害リスク軽減・管理法:Philippine Disaster Risk Reduction and Management Act of 2010(日本の災害対策基本法に当たる)」に基づく国家災害軽減・管理計画(日本の防災基本計画)と同管理会議(日本の中央防災会議)の活動について紹介が行われました。台風等に対して、PAGASAも含めてフィリピン政府全体での対策の体制が強化されてきていることが伺える内容でした。

【イントラムロス探訪記】

セミナー等の合間に、PAGASA 幹部のご厚意によりマニラで最も古い地区、“イントラムロス(Intramuros)”を訪れました。この地区は、16世紀にスペイン人により作られた最古の町で、マニラという名前の発祥地です。イントラムロスは、城壁に囲まれた要塞ということから「壁の内側」を意味します。スペイン支配下の三百年以上にわたる首都で、東洋におけるスペイン帝国の政治・文化・教育・宗教・商業の中心都市としての役割を果たしてきました。

地区内にはフィリピンで最も古い要塞の一つ、1571年に建造されたサンティアゴ要塞があり、フィリピン独立の父と言われる19世紀末の国民的英雄、ホセ・リザール(José Rizal)の偉業を讃える展示館もあります。スペイン統治時代にも、イントラムロスは、戦争や海賊による被害、さらには、地震により、特に1880年のルソン地震ではサンティアゴ要塞入口にあった大伽藍が倒壊するなどの大きな被害を受けています。

その後、1899年の米西戦争、翌年にはフィリピン人により共和国が建国されたものの、独立後も米国との激しい戦闘が続けられています。さらに、第二次世界大戦に入ると、3年間日本軍により支配され、イントラムロスも日本軍とアメリカ軍の激しい戦闘や爆撃で大きな被害を受け、多くの建造物が破壊されています。また、日本軍撤退後には、サンティアゴ要塞の地下牢やその付近で600名を超えるフィリピン人の犠牲者が発見されるという悲劇の地として遺されています。

1979年にはフィリピン政府にイントラムロス管理局が設置され、イントラムロスの建物や景観の保存・管理が強化されて、現在では、貴重な歴史遺産・公園として整備が行き届き、重要な観光資源となっています。しかし、今も銃弾や爆発の跡が残り、数世紀にわたる度重なる戦争や海賊被害等、過去の悲惨な歴史を通過してきたことも忘れることはできません。



サンティアゴ要塞(Fort Santiago)のメインゲート。
第二次世界大戦で上部が破壊、戦後修復されている。
右が筆者で、左はセンター平専任主任技師(JICA/J-POWプロジェクトで客観的な予報技術の開発支援を担当)。



サンティアゴ要塞の Pasig 川の河岸にある地下牢 (Dungeon)。
スペイン統治時代は囚人の牢獄として使われていた。



地下牢(Dungeon)の内部。
数百というフィリピン人が幽閉され、犠牲となった。右は、分かり易く解説しながらガイドを務めて頂いたイントラムロス管理局・公園管理事務所の担当者。

日本とフィリピンの両国は、こうした歴史を乗り越え、現在では非常に良好な友好関係にあり、当センターが実施してきた JICA プロジェクトにおいても技術支援をとおして PAGASA 職員と友人や同僚のような信頼関係を築いてきました。日本とフィリピンは、ともに台風や地震火山という大きな自然の驚異を前にしており、今後とも気象分野等も含めて互いの国民の安全・安心のために国際協力を一層推進していく必要があります。センターとしても、その知見・経験を活かして、気象庁や JICA 等とも連携し協力を頂きつつ、微力ながら引き続き国際貢献を果たして行きたいと考えています。

(理事長)